

## 論文審査の結果の要旨および担当者

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名

CHANG Chih-Hao

論 文 題 目

The Effectiveness, Perceptions, and Practices of English Private Tutoring among Taiwanese Secondary School Students

(台湾の高等学校の生徒における英語の個人指導の有効性、認識、および実践)

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 山田 肖子

委員 名古屋大学 教授 伊東 早苗

委員 名古屋大学 准教授 内海 悠二

# 論文審査の結果の要旨

塾や家庭教師といった、学校教育外の教育活動は世界的に拡大しており、教育制度を成り立たせている影の存在(Shadow education)として、研究関心を集めている。しかし、こうした学校外の教育については、叙事的な報告が多く、その効果について検証した例は限られている。そこで、本研究では、台湾の英語教育を題材に、制御介入実験の方法を用い、学力の変化に対して、学校外個別指導 (Private tutoring、以後 PT と略す) を受けた場合とそれ以外で、成績の向上に変化があるかを検証した。

具体的には、高校3年次に実施される統一英語力テスト (General Scholastic Ability English Test: GSAET)と、その2か月前に実施された模試に参加した生徒のうち、その2か月間に PT を受けた者と受けなかった者を合計 190 名無作為抽出し、それらの生徒自身及びその親、彼らに関わった PT の講師、学校の教員などに対し質問票及びインタビュー調査を実施した。

論文は7章からなり、第1章では、研究の背景・目的・方法を概説し、第2章では、PT 及び Shadow education に関する先行研究を整理した。また、3章では、台湾における PT、子どもの教育に対する親の関与、及び家庭の社会経済的状況と親の教育関与に関して、先行研究や既存データから概観した。4章以降では、独自のデータに基づく分析が提示された。まず、第4章では、PT が高校生の統一英語力テストの結果に及ぼす影響について、差分の差分分析(Difference in Differences: DID)を用いて分析した。その結果、PT 実施の有無、更に、親が教育に高い関心を持って関与する度合いがテスト結果に有意の差をもたらすことが確認された。同時に、親の関心や PT 実施は、家庭の社会経済的状況と密接に関わっていることが分かった。この結果を受けて、第5章では、主にインタビューの結果を用いて、親や生徒、PT の講師や学校の教員が PT を受ける利点や弊害をどのように認識しているか、なぜ PT を受けるのか、また、PT を受けることを阻害したり促進したりする要因は何か、といったことを定性的に分析した。第6章では、親が教育に関与する度合いが成績に影響するとの5章での分析を受け、具体的にどのような関与が特に重要なのかを特定し、その理由を明らかにすることを試みた。教育に関与する度合いと相関性が高いと思われる家庭の社会経済的状況に関する変数の内生性を制御したうえで分析を行った結果、親の関与の中でも特に PT に直接関係する活動が正の相関が高いのに対し、親が学校での活動に参加したり教師と関わったりすることは成績の向上には貢献しないことが分かった。また、生徒自身の自己学習については、宿題、予習、復習のすべてに関して成績に強い影響を及ぼしていることも分かった。

なお、本博士論文のテーマに関連した論文は、既に国際的に定評のある International Journal of Educational Development に単著で掲載されている。

## 2. 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- Shadow education に関しては、比較国際教育学の分野では、多くの研究が行われている。しかし、それらの多くは、実際に PT が学力向上に対してどれだけインパクトがあるのかは示せてお

## 論文審査の結果の要旨

らず、叙事的である。こうした状況に対し、PT が学習成果に及ぼす影響を実証的に示そうとした点で、本論の学術的貢献は評価できる。

- 統一英語力テストといったハイステイク・テストの結果を研究分析に用いる許可を得ることが難しい中、模試及び本試の結果とそれに関連付けた質問票・インタビューを実施できたことは、本論提出者の経験とそこで培われた人脈、背景知識によるものが大きい。
- 定量・定性の手法を有機的に組み合わせ、PT の効果、関与する動機、他の要因との関係に踏み込むことに一定程度成功している。

ただし、本論文は、以下の点において改善すべき点があることが指摘される。

- 学校効果分析では、家庭の社会経済的状況が学習成果に強い影響を及ぼすことはほぼ自明とされており、その要因を排除したうえで、他の要因の相互作用を分析することが期待される。しかし本論は、分析の途中では、生徒の社会経済的背景の影響を排除しても自己学習や親の教育支援、PT の有効性が把握できていたはずでありながら、それを全体的な議論につなげることが十分にできず、やや社会経済的要因の大きさに引きずられた結論となっている。
- 教育学の論考としては、PT が学習成果を上げることに貢献する教育内容の面での検討があることが望ましい。また、そうした分析があれば、学校教育の改革等に対する提言にもつながる可能性がある。しかし、本論は、介入前と介入後のテストの総合点を比較するにとどまり、PT によって具体的に学習者のどのような能力が向上した結果、テストの得点が上がったかまで踏み込めてはいない。
- 統一英語力テストを受けた生徒、その親、PT 及び学校の教師といった、調査参加者のカテゴリーごとに分析結果を順次提示する形となっており、同じような話が複数の章で出てくる一方、全体を通貫するテーマを中心として関係者の視点の違いを対比することは十分にできていない。

このように、議論の提示方法や総合的な考察において向上の余地は残るものの、本論文が取り上げている Shadow education は、比較国際教育学、英語教育の分野において国際的に高い関心もたれているテーマであり、それに対して入手困難なハイステイク・テストの結果をもとに、介入前と介入後、介入グループと対照グループを精緻に比較した実証分析を提示したことは評価に値する。このことから、本論文は、博士論文として期待されるレベルには十分に到達していると判断される。

### 3. 結論

以上の評価により、本論文は、博士（国際開発学）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。